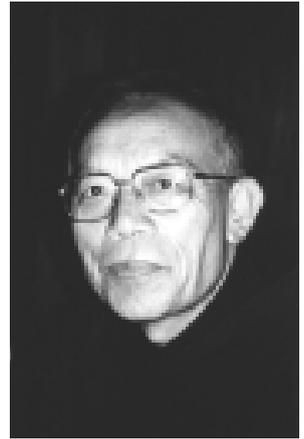


パーチェ エ ベーネ
Pace e Bene (平和と善)
 今に生きるフランシスコの魂

隠れキリシタンの末裔 田川幸雄修道士に聞く



田川幸雄修道士

長崎県の西彼杵半島に外海という町がある。遠藤周作の『沈黙』の舞台となった隠れキリシタンの里である。聖フランシスコ修道会の田川幸雄修道士は、1931年(昭和6年)、この外海町(当時は外海村)の黒崎に生まれた。外海に生まれるということは何を意味するのだろうか。

外海町

フランシスコ・ザビエルがキリスト教布教のために鹿児島に上陸したのは1549年。パードレ(神父)の第一陣が外海町に入ったのは1571年だった。キリシタン大名保護下での布教時代を経て、迫害、殉教、潜伏の時代に入り、キリシタン禁制が撤廃され弾圧が行われなくなったのは明治時代に入ってから1873年(明治6年)だった。

キリシタン大名大村純忠の領土であった頃は村民のほとんどがキリシタンだった。キリシタン迫害が始まった頃、ここにも多くの殉教者が出た。代官から藩に出された上書が残っており、そこには山口、松口、田川、西田など武士と思われる殉教者の名前が見られる。その後、苗字をもたない農民として暮らしていた彼らの子孫が、1870年(明治3年)、平民も苗字を許されるようになったとき先祖の苗字をつけた。今信者の間に多い山口、西田、田川というような苗字は決してこの歴史と無関係ではない。

「両親も、祖父母もクリスチャンでした。家から教会までは歩いて15分、小さいときから毎朝5時に起こされて、ミサに通いました。雨のとき、雪のときは辛かった。ミサから帰って急いで朝食をとり、すぐ学校に行きます。子どもだからキリストがどうのということにはわからない。お墓の横を通って、まだ暗い道をふるえながら、それでも休まず通いました。黒崎、出津のキリシタンの歴史について知ったのはだいぶ後のことです。遠藤周作ではありませんが、子どものときはそんなものです」

修道士への第一歩を踏み出したのは、14歳のときだった。本河内にある聖フランシスコ修道会の修道士が、各地を回って志願者を募集していた。

「自分から進んで行きたいというようなことはなかったと思います。周りから言われて、なにか追われるようにして行ったような気がします」

長崎市の本河内で中学、高校に通い、その後の1年間は修練期だった。学生時代から、授業のないときはかなりの労働をした。材木運び、修道院内の工事の手伝い、活字を拾ったり、冊子を折ったり。とにかくできるだけお金をかけないで、少しでも多くの『聖母の騎士』誌を出すのが修道士たちの布教活動だった。

修道会に入るための準備期間である修練期を終えると、先に進むか、そこで辞めて帰るか、自ら決定しなければならないときがくる。まだ20歳前の若者は、どんな気持ちで“有期誓願”を行うのだろうか。

「自分は本当にこれから修道会に一生を捧げるのか、と思うと、追いつめられてせっぱ詰まった気持ちになりました。人間の弱さを考えて、一応3年という有期の誓願でしたが、自分の中では無期誓願と同じです。神の前では、3年などという年月はありません。一生をかけて、ということですから、そのときは相当な葛藤がありました」

田川修道士は、有期誓願を終え、東京に上る。

コルベ神父と聖母の騎士修道院

今も長崎市本河内にある、田川修道士が学んだ「聖母の騎士修道院」。日本における歴史は、ポーランド



この外海の美しい海には、その昔殉教した人が囊に包まれて流されたという。今、夕陽ヶ丘という美しい岬には「沈黙の碑」が立ち、「人間がこんなに哀しいのに主よ海があまりに碧いのです」と刻まれている。

ここには遠藤周作記念文学館の建設も予定されている。



A

の科尔ベ神父の来日で幕を開ける。700年の伝統をもつ聖フランシスコ会の司祭だった科尔ベ神父は、生涯をかけて、この地球上に、けがれなき聖母にすべてを捧げる信仰者を増やすという理想を追い求めていた。新しい修道会を創るのではなく、伝統ある聖フランシスコ会の中に会をもち、自らの手で『聖母の騎士』誌を印刷・発行し、厳格な聖フランシスコの修道生活に生きた。その東洋での拠点が長崎だった。

昭和5年から11年までの6年間、長崎で布教活動に専念した科尔ベ神父の足跡は、小崎登明氏(本名・田川幸一)の著書『ながさきの科尔ベ神父』(聖母の騎士社・聖母文庫)に詳しい。小崎(田川)氏は、田川幸雄修士のいとこである。1928年生まれなので、幸雄氏の3つ年長。北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に生まれたが、本籍を同じく外海町黒崎に置く。昭和20年8月長崎・浦上で原爆にあい、2カ月後聖母の騎士修道院に入っている。

科尔ベ神父と聖フランシスコ会修道士たちは、粗末なバラックに住み、黙想と労働に過ごす日々を送る。初期の頃の修道士の寝室は屋根裏だった。内側から瓦が見え、瓦の隙間から夏はヤブ蚊、冬は雪が忍び込んだ。ポーランドでは主食のじゃがいもが日本では高いので、食糧係の修道士は「日本にじゃがいもはない」と仲間と言っていた。『聖母の騎士』誌の発行にお金を回すために科尔ベ神父は、栄養失調が原因の腫れ物で痛む足をひきずり、3銭のバス代を節約した。黙々と自らの手で働き、雑誌を発行する西洋行者たちの姿は長崎の人々の心をとらえた。科尔ベ神父が1930年、長崎に上陸した1カ月後に月刊『聖母の騎士』を1万部出した印刷所は、今でも本河内の聖母の騎士修道院で出版を続けている。『聖母の騎士』の他に聖母文庫を発行することによって、科尔ベ神



B

父の遺志を人々に伝え続けている。

科尔ベ神父—アウシュビッツの死

日本で『聖母の騎士』の発行と学園教育に専念した後、1936年(昭和11年)科尔ベ神父はポーランドへ帰国した。1939年第二次世界大戦勃発。1941年2月17日、修道院にやってきたドイツ兵に連行された神父は、ワルシャワで投獄された後、5月にアウシュビッツに送られた。

その年の末、科尔ベ神父が収容されていた獄舎に逃亡者が出た。逃亡者を1人出すと、同じ獄舎に収容されている者10名が処刑される。2人めを出すと20名。処刑法は、収容されている者たちが、これだけでは死にたくないと思っていた餓死率送りである。妻と子がいると泣いて訴えた一人に代わって、自分が行きたいと進み出た神父に、人を殺し慣れていた収容所長も声を失った。

科尔ベ神父は餓死率にくだった10人の中で、最後まで生き残った。身代わりになった日が7月29日、死の注射を受けたのが8月14日。聖母マリアへの信仰で、飲まず食わずで病弱な身体を17日間もちこたえさせた。他の無惨な餓死の死体と違い、神父の死体は清潔で輝いているように見えた、と後に死体運搬係の獄吏が語っている。

聖書に「友のために生命を捨てるより大きな愛はない」という言葉がある。この福音的愛を実践した科尔ベ神父は、「愛の殉教者」として世界の人々の尊敬を集め、1982年10月10日バチカンにおいて、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世によって、カトリック聖人にあげられた。

科尔ベ神父の聖母の騎士会で修練期を終えた田川修道士は、有期誓願をして東京に出てきた。北区の西ヶ原の神学校で受けた授



アシジの聖フランシスコ

業はすべてラテン語だった。日本語でも難しい哲学の授業をラテン語で受け、試験に通らず脱落していく者も少なくなかった。試験に受かり哲学を修めた後、病気をして病院回りをしたが、やがて長崎の小長井にある聖フランシスコ修道会の養護施設に落ち着く。人生の大きな部分を過ごすことになるこの施設では、身体をはって子どもたちと生きた。

「子どもたちはよく逃げ出します。上手に逃げるのを追いかけて回して、けっこうおもしろかったですね。だんだん、勘で、今どのへんを逃げているのかわかるようになります。夜中まで走り回っていました。夜中の3時に警察から電話があれば、すぐに連れ戻しに行きます」

1991年3月から1997年3月まで、6年間をフランシスコの聖地アシジで過ごす。どのようなきっかけでアシジに向かうことになったのか。

「もう学校も停年近くになり、学校でも古株になってくると、会議などで子どもたちと離れていることが多くなりました。もうこの先長くはないだろう、と思ったときに、最後にあたって、もう少し自分を探るといふか、人生をもっと静かに見つめ直したいと思うようになったのです。ちょうどそこに、アシジに行かないかという話が入ってきました。欧州、特にイタリアには行ってみたいと思っていましたから、言葉の問題はありましたが、ラテン語を脱格にすればなんとかなると思って出かけました」

「アシジでは、聖フランシスコ教会大聖堂で、訪れる日本人を教会内に案内して説明を行いました。各国の修道士がいましたが、



c

日本人訪問者の数は多く、15~20名くらいの団体が1日4組はいました。多いときには1日500人ということもあった。3年後に日本人修道士が1人応援に来るまでは1人でしたから、過労で病院に担ぎ込まれたこともあります。ところが、身体はどんなに疲れていても、不思議と疲れたとは思わないんですね。夜はぐたーつとなりますが、朝になると元気になって、不思議にファイトが湧いてくるんです。朝のミサで祈ると、不思議なエネルギーが湧いてくるんですね。疲れ過ぎていたときも、眠りながら説明だけはちゃんとしていたと言われました。1人でも多くの日本人訪問者に、フランシスコのことを知ってもらいたいと思うばかりでした」

アシジの聖フランシスコ

聖フランシスコは、1182年(一説に1181年)イタリアのアシジに生まれた。アシジは、ローマの北方に広がるウンブリア地方の丘の上に位置し、旧市街の人口が5000足らずの美しい街である。フランシスコは20歳を過ぎた頃すべてを捨てて新しい生活に入り、1210年、福音を告げる共同体を創るために11人の弟子と共に修道会「小さき兄弟会」を創立した。1226年10月3日、44歳で亡くなったフランシスコは、その2年後には聖人の列に加えられる。毎年10月4日は聖フランシスコの祝日とされている。

カトリックの聖人の中で最も今日的と言われ、また、日本ばかりでなく世界で最も人気のある聖人と言われる聖フランシスコ。ウンブリア平原に咲く小さい花のように、また大空にさえずる雲雀のように自由を生きたフランシスコにちなんで、米国は1846年、カリフォルニア州の一都市をサン・フランシスコ(San Francisco)と改名した。洗礼を受けるときには自分の好きな聖人を洗礼名に頂くが、アシジの聖フランシスコを選ぶ人は非常に多いという。

「アシジで暮らしていると、アシジには今でもフランシスコが生きているという感じがするんですね。そこに暮らしている人たち



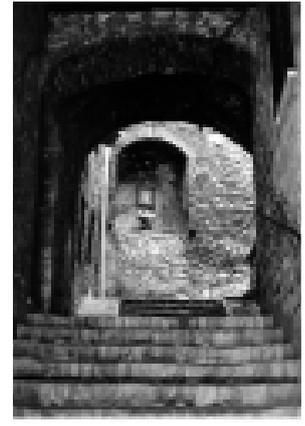
D

の善良さと、フランシスコを非常に大事にしている心が伝わってきます。フランシスコの生涯を見ると、彼は神が創った自然、つまり太陽、月、星、水などを通して神を賛美しています。イタリアの国の守護聖人でもあり、1979年には環境保護運動の守護の聖人にもなりました。狼に話かけると狼がおとなしくなったという『グッピオの狼』の話、ジョットの描いた『小鳥に説教する聖フランシスコ』は有名ですが、街を散歩していると、フランシスコが本当に鳥に話かけていただろうという感じがしてきます。フランシスコは道を歩きながら、もうニコニコして、ほとんど踊っていたのではないと言われてますね。それくらい喜びが心からあふれ出ているそうです」

「また、フランシスコは、解釈しないで、聖書を文字どおり実行した人。私があなた（神）にお願いしたいことは2つあります。1つは、受肉と十字架の苦しみを私にもお与えください。もう1つは、人々を愛するすばらしい心を私にもお与えください。そして2つともかなえられたと言われてます」

「聖パウロは、“私は戦いを立派に戦い抜き、決められた道を守りとおし、信仰を守り抜きました。今や、義の栄冠を受けるばかりです*”と言って壮絶な最後を遂げましたが、私などはすぐ横道にそれ、崖っぷちから落ちそうになります。弱いからいいんじゃないですか。すべての人を兄弟としたフランシスコは、弱いままの私たちを受け入れてくれます。私などは今、フランシスコのフの字も生きていないような気がします、自分なりにでいい、フランシスコの生き方を、自分の残された人生で少しでも活かしていきたい。また日本の皆さんに少しでもお伝えしたいと思っています。出されたものは何でも喜んで食べる、ないものは要求しない、というようなことから、人を裁くな、すべてを受け入れろということまで。みんながそういう気持ちになれば戦争など起こるはずがない。フランシスコは平和の使者でもあります」

「古今東西フランシスコに魅せられた人は多いが、どう生きるかはその人にまかされています。いっぺんに望むのではなく、小さ



E

なことから少しずつ。こんな世の中ですが、焦らなくてもいい。それに、教会は不思議なんですね。その時代にあった聖人を送り出すんです。教会が堕落したときにはフランシスコが現れた。そしてコルベ神父、マリア・テレサ——その時代が必要とする人を送ってくれます」

聖フランシスコの生涯を描いたFranco Zeffirelli監督の映画『ブラザー・サン シスター・ムーン』（1972、伊）では、贅沢と倦怠の中で精気を失った裕福な人々とは対照的に、清貧の中で、人のために楽しげに働くフランシスコたちがこう歌う。

“夢をまことにと思うならば、あせらずに築きなさい
その静かな歩みが 遠い道を行く、心を込めればすべては清い
この世に自由を求めるならば、あせらずに進みなさい
小さい事にもすべてを尽くし、飾りない喜びに気高さが住む
日ごとに石を積み続け、あせらずに築きなさい
日ごとにそれであなたも育つ、やがて天国の光があなたを包む”

「帰国後は教会と教会付属の幼稚園で、小さい子どもたちといっしょに過ごしています。毎朝6時半からミサがあります。どんなときでも、必ず毎朝祈りの時間があります。精神的に迷っている人、飢えている人は多い。この小さな礼拝堂にも、入りきれないほどの人が来ます。神父、94歳のポーランド修道士と3人で忙しい毎日を過ごしています」

*参照 テモテへの手紙 二 4,7-8a

写真 A, B by Y. Sata

写真 C, D, E by S. Iiyama

参考図書：『アシジの聖フランチェスコ』ジュリアン・グリーン著、原田武訳、人文書院
『アウシュビッツの聖者コルベ神父』マリア・ヴィノフスカ著、岳野慶作訳、聖母の騎士社
写真集『アシジの丘』撮影：北原教隆、地湧社